

○伊東寛史・江頭淳二・下田敏史¹⁾・東江 栄¹⁾・野瀬昭博¹⁾

(佐賀農業セ白石・佐賀大農¹⁾)

【目的】

干拓地では、土壌への塩類集積や連作障害が問題となっており、その回避技術の確立が望まれている。その中で、塩分を特異的に吸収するアイスプラントの存在が明らかとなり、塩類土壌のクリーニングクロープとして利用できる可能性がでてきた。そこで、アイスプラントの露地栽培における定植適期や安定栽培技術の確立に取り組んだ。

【材料および方法】

試験1：セルトレイ(50穴/トレイ)で育苗した4～5葉苗を6月3日、7月6日、9月26日、10月18日、11月10日、12月12日に定植した。栽植様式は、畦幅1.45m、株間30cm、3条植えで行った。施肥量は、基肥N:P:K=14:12:14(成分kg/10a)で行った。試験規模は、1区4.5㎡の3反復で行った。

試験2：8月9日に播種したセルトレイ(50穴/トレイ)苗を①ビニール雨よけ②切りわら③裸地の区を設け、9月26日に定植した。栽培様式、施肥量、試験規模は「試験1」と同様に行った。

試験3：8月30日に播種したセルトレイ(50穴/トレイ)苗を①黒マルチ②裸地の区を設け、10月18日に定植した。栽培様式、施肥量、試験規模は「試験1」と同様に行った。

【結果および考察】

試験1：6月3日、7月6日定植では、生育期が梅雨時期と重なり、強い降雨により全株枯死した(表1)。9月26日定植では、生育が最も優れ、定植5週間後の1株当たりの重量は約400g、8週間後では約1400gとなり、急激に生長した(表2)。定植35日後の枯死株率は43.3%であった(表1)。10月18日定植では、枯死株は発生せず、定植5週間後で約65g、8週間後では約300gと9月26日定植と比較し劣った(表2)。11月10日、12月12日定植では、生育量が遅延し、その後枯死した。

以上の結果より、強い降雨、夏場の高温に弱いこと、また、気温の低下にともない、生育量が抑えられることから、露地栽培における定植適期は9月下旬～10月上旬と考えられる。

試験2：裸地区では、枯死率が定植35日後までに

43.3%と高かったが、切りわら区では13.3%、雨よけ区では6.7%と枯死株が著しく低下した(表3)。

これにより、6～8月の梅雨、高温時期においても、雨よけ、切りわら等の利用により、枯死株が低減できると考えられる。

試験3：黒マルチ区の1株当たりの重量は、定植8週間後で裸地区と比較し、約1.7倍となった(図1)。

従って、生育量が劣る10月中旬定植以降においても、地温を確保することで、栽培が可能になると考えられる。

表1. 定植時期の違いによる定植後の枯死株率(%)

定植日	7日後	14日後	21日後	28日後	35日後
6/3	0	8.9	24.2	55.6	100
7/6	0	100	-	-	-
9/26	0	30	33.3	36.7	43.3

表2. 収穫時の生育(定植8週間後)

定植日	株張り(長) (cm)	株張り(短) (cm)	1株当たり重量 (g)
9/26	65.9±6.2	57.1±7.1	1412.6±349.9
10/18	40.6±4.1	30.7±7.1	293.1±71.1

表3. 雨よけ、切りわら施用による枯死株数

試験区	10/3	11	17	24	31	計	%
雨よけ	1	1	0	0	0	2	6.7%
切りわら	1	3	0	0	0	4	13.3%
裸地	0	9	1	1	2	13	43.3%

※30株調査

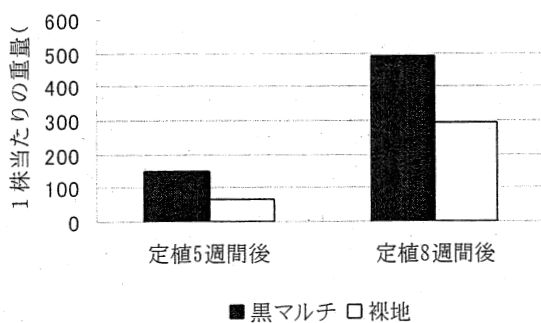


図1. 黒マルチの有無が生育に及ぼす影響(10月中旬定植)